寄稿

寄宿舎「積慶寮」の怪

佐々木京一（新1回生）

昭和二一年旧制四年の時、食糧事情が極端に悪くなって、大通り「御田屋清水」隣の下宿を引き払って、春木場の旧制岩手中学校寄宿舎「積慶寮」に入寮した。舎監は特攻隊帰りの阿部巌先生だった。寮生は皆「B29」と呼んでいた。積慶寮の前の空き地に南瓜畑を作り、そこで戦闘服姿の先生は野武士のごとく黙々と鍬を振るっておられた。当時、野菜などは自給自足の生活だった。

寄宿舎は昔、南部藩の首切り場と聞かされていたから、怪談にはことを欠かなかった。夜廊下を歩く時、階段の上りと下りとで段数が違うといって脅かされた。

恐る恐る段数を数えて行く。小心者の私は、どうしても上りと下りの段数が合わない。叫び出したい衝動に耐えて便所に行くと、何とも言いようのない野生のもののひしめく気配がする。

便所の中にしゃがんで、下を見下ろして驚いた。便槽の中には数十匹の鼠が一斉に振り仰ぎ、牙を剝いて、期待の目が私の尻を見つめているではないか。

これには私も動転した。胴震いするほどのショックだった。食い物がなくなった春木場の鼠たちが、寮生の不消化物を食いつないで生きていたのである。怖気を振るって私は、以後寮で排泄することを止めて、専ら学校で用便を済ました。

食糧事情がさらに悪化すると寮では給食が中止になった。食料は自分で準備して炊事しなければならなくなり、仙北町の農家まで米の買い出しに行った。帰りには雨になって、体力のなくなった私は、米袋を担いだまま道端の水溜まりの中に倒れた。学校の先生らしい人が寮まで米を担いで送ってくれた。仏様のように有り難い人だと思った。

副食品に調理の必要がないハンペンを毎日食った。調理の経験のない私は煮干しを買ってきて魚だと思って一生懸命に焼いたが、どうにも焼けず、ホトホト困惑した。

そのうち、調理場の羽目板が日毎にはがされて行くのに気付いた。薪代わりに燃やされていたのである。小便が凍って便所の中で盛り上がり、これもまた日毎に肥大して行くのを眺めて、寮の改革を思い立った。私はいつの間にか副寮長にされていた。

腹が減ってフラフラの状態で登校するものだから盛岡やその周辺の生徒とは、はっきりと健康状態が違っていた。今でもあの屈折した気持ちは忘れられない。

そして、そのことがバネになって良く勉強もし、良く本も読んだ。ただし、友人との交わりに欠けたのは、私のミステークだった。

体操部だった私は寮に一緒にいる弟も体操部に入れた。部長は新卒の足沢至先生、キャプテンは盛岡で有名人の鳴海正人君である。部の練習が終わると弟とあの長い本町の通りを、空腹と疲れと眠気でフラフラしながら、上ノ橋を渡って加賀野「川留稲荷」を通り春木場の寮まで帰った。

時々自宅から送ってくる外食券で食堂に入って食うことが何よりの楽しみだった。それにしても、兄弟ともに良く病気もせずに、あの飢餓の時代を生き抜いたものだと思う。

私は歴史や古典が好きだったので、担任の

小林博先生（通称ロッパさん）、新卒で来られた水原一先生などには随分お世話になった。

昨年、「水原一先生古稀記念論文集」が企画され、私の論文も採用された。先生へのご恩返しになったものか、ご迷惑をおかけしたものか、甚だ心もとないが、同級生の山口北州印刷の社長山口徳治郎君や岩手中高校長西在家寛君にはたいへんうらやましがられた。

歴史については、昨年、地方史賞の「第三回森嘉兵衛賞」を頂いて、法政大学での受賞式に出席してきた。ひとえに山口君始め岩中・高の同級生の皆さんのお陰である。そして、恩師水原一先生と小林博先生に深く感謝申し上げる次第である。

私は郷里岩泉の山野を散策する時、必ず岩中の校歌「朝日に匂ふ桜花」と「ツララバックイエロー」のラグビー部部歌を大声を上げて歌う。私の青春歌である。